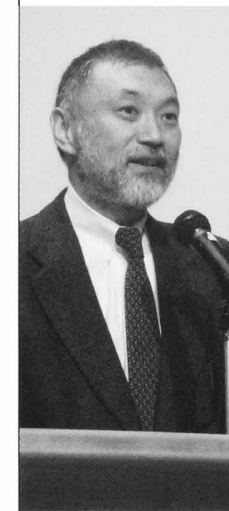
はじめに



白山 義久
しらやま よしひさ
京都大学フィールド科学教育研究センター長

今回で「時計台対話集会」は七回目となります。みなさんと一緒に見直す機会として今までの「時計台対話集会」はどんなものだったか、少し、過去を振り返ってみたいと思います。

いままでの対話集会のポスターを見ますとテーマは毎回違っておりますが、キーワードとして「森里海」は、必ず入っています。理科的なテーマの回と社会科学にポイントを置いた回があります。一回目と二回目は、二〇〇四年の七月に二週連続で行っており、C・Wニコルさんのお話を伺いました。二回目(数え方によると三回目)には、「森と川と海の対話」ということで、畠山重篤氏の講演等を行っています。今日講演をいただきます天野礼子さんにも、この時に講演いただいております。二〇〇六年のときには、木文化という言葉を初めて使っているのですが(この言葉はわれわれが現在進めております概算要求のプロジェクトにも使われています)、この言葉の始まりの年といえます。この時は当時の総長の尾池和夫先生からお話をいただき、村田製作所の村田康隆現会長からもお話をいただきました。次の年には、村田製作所の「ムラタセイサク君」というロボットに出演していただきまして、非常にたくさんの方にご参加いただきました。養老孟司先生にお話をいただいたと言うこともあるでしょうが、集客効果は「ムラタセイサク君」の方が大きかったのではと思っています。二〇〇八年には、生態学研究センターとのジョイントで、初めてフィールド研単独で

はない対話集会を開催いたしました。そして昨年は、木文化の創出をテーマに、若手の建築家の方と、国連大学高等研究所のあん・まくどなるどさんに来ていただきました。

毎回ご参加いただいている方々にアンケートをお願いしております。入場者数については残念ながら過去二年間は減る傾向にあります。しかし、リピーターの方はどんどん増えておりまして、固定客はできていると評価しております。年齢層はかなり高齢化しておりまして、五〇歳を超える方が全体の六割程度を占めるというのが、過去の状況であります。職業の比率につきましては、大学生、高校生の比率に毎年注目しているのですが、あまり高くなく、大学生の比率は毎回一〇パーセント程度です。参加してくださっている方のお住まいですが、大阪、京都、滋賀、この三府県の方が圧倒的です。しかし、その他が三〇パーセントくらいおられまして、遠くからお見えいただいている方も多数いらっしゃいます。満足度ですが、良かった、非常に良かったというのがコンスタントに九〇パーセントで、去年だけちょっと低いのですが、比較的満足度が高いと自己評価をしています。以上が、今までの時計台対話集会です。少し最近、満足度が下がったとか、参加者が減ったということがあるので、何とかしなければと思っており、今回を考え直す機会にしたいと思っております。

そこで本日は、この対話集会を最初に仕掛けられた前センター長の田中先生に基調講演をお願いしています。また、どうやったら市民の参加を増やせるかということのアドバイスをいただける可能性があるということもありまして、「子どもたちと森で学んだこと」というタイトルで、久山様にお話をいただこうと思っております。休憩のあとは、この対話集会をずっとサポートしてくださってきた天野礼子さんの話と、フィールド研の上野助教にいくつかの提案という形で話題提供をしていただき、そのあとで、パネルディスカッションという予定にしております。長丁場でございますが、最後までよろしくお付き合いをお願いします。